

「好きするデー」と探究的な学びのデザインの関わり

12月に開催された公開研究協議会Ⅱにおいて、5年生のはばたき学習の実践が公開された。当日の授業もさることながら、そこに至るまでの授業を定期的に参観させていただき、個人的に大きな学びになり大変ありがたかった。5年生の担任の先生方と稲垣勇介先生のご尽力に敬意を表すとともに、中央教育事務所の伊藤加奈子先生には、事前検討会から当日も含めて、探究的な学びのあり方についての的確な指導助言を下された。この場を借りてお礼申し上げたい。

本稿では、はばたき学習として行われた「好きするデー」と、探究的な学びのデザインの関わりについて、昨年度までと同じく3つの視点を使って考察したい。

(1) 総合的な学習の時間ならではの「わくわく」が感じられる学びだったか

獲得させたい概念にたどりつくまでの、道筋の多様性が確保されているという点は昨年度までと同様で、個々の子どもがそれぞれに深く追究しようとしている姿が見られた。子どもたちがそれぞれに、自分の「好きなこと」を追究する機会があるというのは、この実践計画の話聞いた大学生も「うらやましい」と言っていたし、それ自体が有意義な時間なのだと思う。

一方、「好きするデー」については、子どもが好きなことをしてただ遊んでいるだけではないか、という意見が出てくることは事前から予想された。そして、そうならないように授業者の先生方が苦心されていた。実際、授業を見た方が、遊んでいるだけのように見えるというのわからないはない。ただ、「好きするデー」は単元のねらいに迫る一つの手段と見るべきである。「好きするデー」という機会を通じて、子どもたちはどんな概念を形成、更新していったのか。単元の目標には、本単元の目標には、(1)『『好きなことをする生き方』について考えをもつことができる』がある。さらに(2)では、「自他の考えを比較したり、(中略)価値を関連付けたりして、生き方について考えることができる」とある。「好きなことをする生き方」というテーマは大人にとっても考えるのが難しい。「好きなこと [だけ] をする」、あるいは「好きなことを [仕事に] する」という捉え方もある。いずれにしても難しい。子どもたちは実践を通じて、どのような概念を持つに至ったのだろうか。それに対して、先生方がどう向き合ったのかも興味深いところである。

また、学校で行う「好きするデー」には自ずと制限や限界があり、子どもたちが好きなことをとことん追究するというところまではいかない場合もあっただろう。「学校で」という条件があるので、真に好きなことを実践できず、あるいは自らの「好き」を公表できず終わった児童もいるかもしれない。さらには、「好きなこと」と言われても特にない、という児童もいたかもしれない。自分は何が好きなのかよくわからない、自分が好きだと思うことは、価値のないものかもしれない、好きするデーでは、好きするデー用のことをやります、といった具合に。子どもたちの真の「好き」を掘り起こしたり、喚起したりするのは、どうすればよいのだろうか。

(2) 学習課題、テーマへ迫ることを促す「仕掛け」は学習効果をもたらしていたか

(3) 子どもたちは自らの学びにおける「行為の中の省察」を行っていたか

(2)(3)は裏表の関係にあるので、まとめて記述する。本実践における子どもたちの省察を促していた場面として、教師との「問答タイム」があったことが特筆される。ひとりひとりの子どもが4人の先生と、自分が取り組もうとしている「好きなこと」、それを実現するのを阻む障壁、障壁を乗り越えるための手立て、こうしたことについて問答する時間である。この時間は、探究的な学びをデザインする上で、教師にとっても子どもたちにとっても特に重要な時間だと思われた。教師の側は、その児童が追究しようとしていることにGOサインを出してよいかどうかグルグル考える。子どもたちは子どもたちで、先生にこれでOKをもらえるだろうかと思考をめぐらせながら、恐る恐る先生と話す。「いいよいいよ、はいどうぞ。やりたいことをやったらいいよ」で済ませるのではなく、なぜそれをするのか、実践したことが周囲にどのような影響を及ぼすのか、自分はそれを通じてどのように成長できるのか、など問いかけていくことで、子どもたちの省察が深まっていく。この時間の子どもたちの姿は、一度自分の席に戻って考え直したり、厳しい表情や引き締まった表情を浮かべながら、深く省察している学びの姿であった。

上記の論点に加え、昨年度課題になっていた「協働的な学びとの両立」という点も、引き続き

課題だと思われた。没頭しつつ、他の子どもたちとつながる場も重要である。欲を言えば、本実践では必要な物資を校外にお買い物に行く場面はあったが、それ以外に教室外の人とのつながりを持つ場面はあまりなかった。好きするデーが「学校で」という限定はあったものの、教室からはみ出して学びが拡張していく展開がもっとあっても面白かったかもしれない。

付記 ある日のはばたき学習の授業中、ひとりの児童が、マッキーの1991年のミリオンセラーの例のヒット曲を口ずさんでいて、本単元とのつながりを感じずにはいられなかった。子どもの頃にしっかり「我」を育めるというのは、とても大事なことなんだと痛感した次第。私が私らしくあるために。興味のある方は、あらためて歌詞をご覧ください。